

東北から東海・東南海そして世界へ向けて

ざっこ Club 代表 佐藤達也

震災の記憶

2011年3月11日、そのとき私は当時勤めていた博物館の資料室にて、定年間近の先輩学芸員がいつも流しっぱなしにしているラジオに気を散らせながら、執筆中だった本の最終作業で四苦八苦しているところでした。昼もすぎが一番、眠気がおそう3時前、今まで聞いたこともない、けたたましい音の緊急地震速報が、今まで聞こうともしていなかったラジオから鳴りだして、東北で起こっている大地震と津波の速報を伝えてきたことで、眠気が一気に吹き飛んだことを記憶しています。博物館がある三重県鳥羽市浦村町にも津波が到達するおそれがあると聞き、先輩学芸員と車で伊勢湾港が一望できる道沿いの駐車スペースへ移動すると、離島の漁船がたくさん港を出て、北へ舳先を向けて待機しているところでした。しばらくそこで様子をうかがっていたのですが、特に変わった様子もなく、「帰ろうか？」となったところで湾奥が大変なことになっていると漁業者から一方を受け、急いでその現場へ向かい、流されて湾内を行ったり来たりする牡蠣養殖の筏の様子を見て、遠く離れた東北の津波のすさまじさを痛感させられました。(図1, 2)



図1. 津波で流される牡蠣養殖筏



図2. 海底の水道管に絡まる筏の残骸や錨、牡蠣養殖資材など(1ヶ月後に潜って撮影)

あれから5年が経過し、フリーランスとなったいま、私たちはどのような形で海と関わって生きていくことができるか、と自問自答しながら、ひとつずつ得られたヒントを誰かに伝えることを目的として日々の活動を行っています。しかし、正直なところ震災当時の記憶などについてはかなり薄れかけていたところでした。そんなとき、東北マリンサイエンス拠点形成事業(TEAMS)の公開シンポジウムへのパネリスト参加に先駆けて、実際に宮城県の被災地の視察にお誘いをいただきました。百聞は一見に如かず、とはまさにこのことで、想像していた復興の姿とはまったく異なる、更地を走るたくさんの県外ナンバーを付けたダンプカーや廃墟となった大川小学校、痛々しい津波の爪痕の数々を目の当たりにして言葉を失うのと同時に、2011年の記憶がよみがえってきました。

これが終わりではない

TEAMS で得られた、数々の研究成果や課題の舞台は東北ですが、それらは東北に限らず、地震大国である日本においては国内すべてに還元できるものではないでしょうか。特に、東海・東南海地域は、ある一定の周期で大きな地震が起こっているといわれており、不謹慎な表現ではありますが、次の被災地として有力候補のひとつであるといえるでしょう。そしてこの地域は、東北と似たような内湾から外洋へと連続した多様な生息環境や、リアス式海岸が存在する中で人々の生活が営まれているなど、東北地域と類似した点が認められます。現時点では約 150 年前の安政大地震で起こった津波がどこまで来たか、次の地震でどこまで津波が襲ってくるか、といったシミュレーションや防災マップおよび避難棟が出来上がり、啓蒙活動が行われているところで、いずれの地域においても防災対策はある一定の終わりをみせているように感じられます。ただし、まだまだ東北から学ぶべき重要なヒントがあることを、今回の視察およびパネルディスカッションにおける議論のなかで感じました。

防災だけでなく復興対策も

東日本大震災の教訓を受けた現在の防災対策によって、今後あらたに震災が起こったとしても、命を守るという部分においてはある程度の成果が得られることでしょう。しかし、被災から 5 年が経過した今なお、復興の形を模索する被災地を見る限り、人々がそこに住み、生活し続けることができるまでの復興対策は別問題としてとらえる必要があると考えられます。特に被災後も沿岸の主幹産業である漁業を継続する形での復興を望むのであれば、それ相応の用意が必要です。TEAMS の研究成果をうかがう限り、流出した瓦礫が散乱する海底で行うことができる漁業は限られていますが、海藻類の採集や養殖、刺網漁、かご漁、一本釣り漁については比較的、短期間で復興できるものであると予想されます。そのため、それらの被災後でも行うことができる漁法を厳選したうえで（漁船の予備を陸上で保有することは現実的ではありませんが）、漁具の備蓄を高台にて保管することや倉庫を分散することは今からでも可能です。そして何より、ある特定の漁業にのみ固執するのではなく、多様な沿岸の生態系の中で最小限の投資で多様な漁業を行うことができる漁獲技術（山たて、観天望気、混獲物への観察眼など）の継承も大切です。

また、津波により大きな被害を受けた女川およびその周辺地域においても、生息環境がすべて破壊されるということではなく、次の年には何らかの漁業を行うだけの自然は回復したとうかがいました。そこに大きく貢献しているのは、何よりも他ならぬ生息環境や生物多様性の存在が重要であると考えられます（当たり前と言えば当たり前ですが）。そのため、震災が起こる前から、沿岸の生息環境や藻場の保全や過密養殖による内湾域の環境悪化を防ぐなどといったことが自然保護目的だけでなく防災対策としても望まれます。

いかにして伝えるか

海にはまだまだ多くの謎があり、調査研究活動を継続しなければならないことは言うまでもありません。しかし、得られた研究結果を、生い立ちや価値観、学歴や立場も大きく異なる漁業

者や一般の人々へ伝えて還元したくても、その両者の間に大きな障害を感じる人は少なくないでしょう。この度、その仲介役の一例としてご指名をいただき、いつか来るその日のために、東北から世界へ、狭い研究業界から社会へとつながる架け橋が広がるお手伝いができればという思いを込め、筆を執らせていただいた次第です。

ただ、極端な言い方をしてしまえば、伝えたくても伝わらない相手には伝わらないし、割り切って諦めた方が良い場合も少なからずあるように思います。言葉を削り、受けが良さそうな情報のみを選択して流すことで「伝わった」ように満足してしまうことの方が心配です。アサリのみに着眼した干潟造成や採苗、安易なガンガゼやアイゴの駆除による藻場保全を行うなどといった活動がその一例です。

あるとき、アサリ漁場の造成効果を調べる潜水調査を委託された際は、「この場所はアサリには適していない」「形骸化した造成よりも、他に予算を使ってほしい」などと報告したことがあります。また、アサリの採苗をすすめる漁業者から、「アサリは海を浄化するから、たくさん増やすべきだ」というコメントを地域の専門家としてメディアに発言して欲しいと頼まれたので「そもそも厳密には濾過食ではないし、食べられないものが意外と多く、擬糞もたくさん出すから浄化してるとは言えないと思う」「アサリしか海に居ないのは逆に気持ちが悪い」と発言したところ、次年度からその手の依頼はひとつもなくなってしまいました。先ほどからアサリばかり槍玉に挙げているので、何か恨みでもあるのかと思われてしまいそうなのですが、アサリの味噌汁や酒蒸し、ボンゴレ、深川飯は大好きです。ただ一般的に良く知られた魚介類を例に挙げつつ、海にはアサリ以外にもたくさんの生き物たちがいて、四季折々の美味しいさまざまな魚介類を旬の時期に食べられる贅沢な幸せが日本にはあることを知ってもらいたかったのです。

話はそれでしたが、伝わらなかったからといって、それ以降にアサリの勉強会を開くなどといったことは行っておりません。そのかわり漁業者としての権利を取得し、漁業者の立場や苦勞を体で理解したうえで、沿岸漁業の技を身に付ける努力をしつつ地域に根差し、調査や研究を継続する姿勢を見てもらうこと、場合によってはその調査に傭船などといった漁業者が得意とする分野で協力を要請したり、水中写真を見せることが個人的な「伝え方」の手法です。幸いにも、日々の活動をサポートしていただける地域の良き理解者の皆さまのおかげで、少なくとも今日まではフリーランスという社会的信用度のない危なっかしい肩書がなんとか維持できています。つまり最初から伝わらずとも、少しずつ理解してもらうことは可能であるということです。

最後に

研究者と社会をつなぐ立場のひとつとして、私のような妙な肩書の人材を増やさずとも、水産業普及指導員、博物館における学芸員、海洋養育を实践できる教員や、研究者との共同に理解のある漁業者や実践者はどこかに居るはずですが、ただし、いずれの立場においても、生物多様性の重要性を理解した上で、防災や復興の姿をイメージできるかどうか、何年も腰を据えて地域の海に根差し、「漁業者からの要望」「前年度から引き継がれるだけの予算」などに振り回されず、

地域にはこだわるけれど地域にはしばられない感性と、ある種の孤独さや板挟みにも耐えられる意思の強さを持つことが鍵になると思われます。

今回、東北における貴重な知見やご意見、BORASのような研究者と社会をつなぐ上で重要なインフラとなるツールの存在を知ることができ、研究の第一線に立たれている皆さまに出会えたことに喜びを感じています。最後になりましたが、このような機会を与えてくださった TEAMS の皆さまへ感謝の意を表すとともに、今後より一層のご活躍をお祈りいたします。また、社会還元のための歩みが、手遅れになる前に1日でも早く始められ、「中間説明者」の育成やサポートも進められることを願うばかりです。

<鳥羽の海で撮影した写真の一部>

